〈研究ノート〉

饒舌な痕跡――記号の楽しみ 1

川　浦　康　至

はじめに

人間の定義として，これまでにもさまざまな言い方がなされてきた。なかでもよく知られているのが「ホモ」で始まる2つだろう。「ホモ・サピエンス」と「ホモ・ルーデンス」。前者は「知性の人」，後者はホイジンガの著書で知られるようになった「遊戯する人」である。それらに「ホモ・ウェスティギウム」(Homo vestigium)，すなわち「痕跡の人」を追加したい，というのが本稿の趣旨である。

人は，何かをすれば「した」という痕跡を，しなければしないで「していない」という痕跡を残す。つまり「現在」という瞬間から痕跡を生み出す存在でもある。

他方，行動の残滓でなくとも痕跡とみなしうるものがある。たとえば，書棚に並ぶ本を考えてみよう。

ふつう，わたしたちは書棚にある本を痕跡と呼ばない。しかし，よく考えると，それらの本は，その当時の仕事，関心や趣味をあらわす痕跡だったりする。痕跡とは，そのものであると同時にアプローチ，見方でもある。

実際，痕跡という視点でながめると，わたしたちの周囲は一気に雄弁な環境と化す。実際，心理学者のゴスリング（Gosling, 2008）は第三者に，寝室のようすから居住者のパーソナリティ（ビッグ・ファイブ）や行動傾向を推論させる実験を行い，両者に一定の対応関係が存在することを見出している（携行品を用いた同様の研究が，藤島（2009）によって進行中である）。

その饒舌性ゆえ，消したい痕跡もあるだろうし，残しておきたい痕跡もあることだろう。一口に痕跡と言っても，残る痕跡，残らない（消える）痕跡，残したい痕跡，残したくない（消したい）痕跡と，実にさまざまである。

痕跡を研究対象とする学問領域に考古学がある。言うまでもなく，考古学とは遺跡や遺物から当時の生活や文化を復元しようとする学問である。そこでの痕跡の追究は確実に成果をあげている。

桜井（2004；2006）は道具の使用痕から，また石神（2006）はゴミを通じて，そして谷畑（2006）は人骨に残された痕跡から，それぞれ江戸時代の人々の生活を活写し，史資料の限界を乗り越えている。

本稿では，誰もが目にしうる身近な痕跡を取り上げ，その饒舌ぶりを見ていく。実際に扱う素材は，筆者がこの数年，収集してきた物件と関連記事である。

歩けばできる痕跡

高村光太郎は1914年に出版した詩集『道程』で「僕の前に道はない　僕の後ろに道は出来る」と詠んだ。それに倣えば，さしずめ「人の前に痕跡はなく，人の後ろに痕跡はできる」と言えよう。

数年前，北海道大学に出かける用事があり，コンピュータセンターのような建物に寄ったときのことである。その階段の踊り場で，物を引き摺ったような痕を発見した（図1）。

表面のリノリウムは削り取られ，その後，何度も踏みつけられたのだろう。地のコンクリートが剝き出しになっていた。踊り場付近の階段部にも引き摺った痕が残っている。重い荷物を運んでいた人たちが堪えられず，踊り場手前で

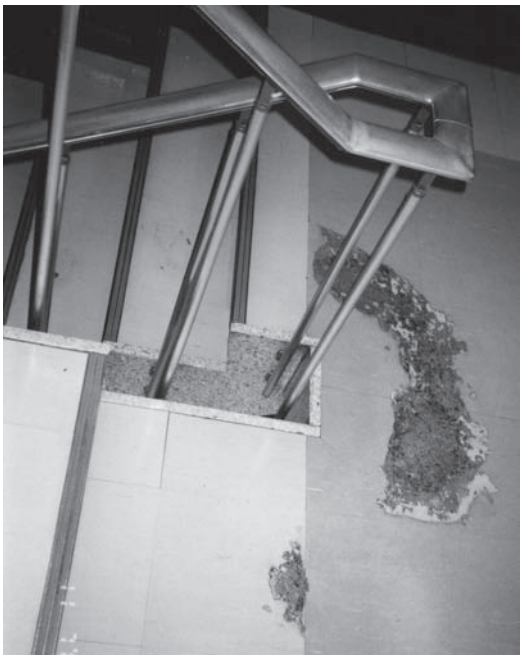

図1　階段の踊り場に残っていた傷（2003年11月，北海道大学情報教育館）

図2　京都御苑内の自転車道（Googleマップ）

いったん下ろして，休憩がてら引き摺ったまま荷物の向きを変えたのだろうか。もちろん，以上は筆者の勝手な想像でしかない。その場に居合わせた人に理由を質したかったが，あいにく叶わなかった。

動物の通行で自然にできた道を獣道と言う。「立入禁止」表示のある芝生の上を走る一本の筋は，人道（ひとみち）といったところだろうか。

この種の有名な痕跡に，京都御苑内の「自転車道」がある。これは砂利の上にできた自転車の轍である。砂利の敷かれた地面を走る際，誰しも地肌が露出している部分を走ろうとする。それが何年も繰り返されて，できあがったのが幅数十cmの道である。この自転車道は，衛星写真でも白い線として確認できる（図2）。

自転車道は生活道路として市民権が得られているのだろう。消されることなく残っている。

他方，沖縄県の竹富島のように，轍や足跡を毎日，（結果として）消している場所もある。島内の道は珊瑚で敷き詰められて，通行の跡が消えにくい。島の人たちは「ほうきの目を入れ

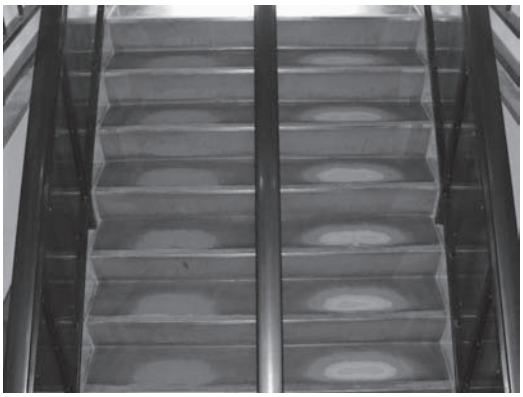

図 3　階段踏み面の摩耗（2009 年 9 月，広島城内。中央の黒く見える線は手摺りである）

る」と表現するが，白い道は毎朝きれいに竹箒で均される。

現地の NPO 法人たきどぅんによれば，以下のような歴史があったという。

「現在，竹富島の代名詞と云われるほどになった，毎朝行なわれる“白砂の道”の清掃。歴史を紐解くと，明治末期から大正時代にかけて疫病の流行を防ぐため，清掃活動を徹底するために始まったと伝えられています。現在ではその習慣が残り，島の人たちの手で残されています」（たきどぅん，2007）。

箒で掃き均され，足跡の消された道が疫病流行防止策の痕跡とは思いもしなかった。

新しい道を歩くような感覚は，気分をリセットさせることもあろう。珊瑚は，春と秋の年 2 回，敷きなおされる。

この夏，ゼミ合宿で広島城を訪れた。1958 年に外観復元された天守閣内部は博物館となっている。図 3 はその閣内の階段に残っていた踏み跡である。

階段は安全を考慮して，右側歩行となっている。一歩一歩踏みしめながら上るのだろう。明らかにのぼりの右側のすり減り方が激しく，もう一つ内側の層まで見えている。この摩耗は，開館以来 50 年間の入場者の「成果」である。

人が通れば，そこがすり減る。それが幾度も繰り返されると，やがて誰の目にもはっきりと見える痕跡となる。

痕跡発のアイデア

エレベータに乗ると，ドアの開閉ボタンに目が行く。「このエレベータ，『閉』ボタンの周りがかなり剝げているけど，せっかちな人が多いんだろうか」と思って，気が付くと駅構内だったという場合が少なくない。そうした駅の 1 つが京王線の明大前駅である。

京王線の下りホームにはところどころ，出窓風の窓があり，その下が少し出ている。それがちょうど腰の位置にあたり，具合がいいのだろう。観察していると，誰かしら，そこに寄りかかっている。その結果，出っ張っている部分はくすむ間もなく，拭かれたように，いつもきれいなままである（図 4 の帯状の白い部分）。

図 4　京王線下りホームの出窓に寄り掛かる人（京王線明大前駅，2009 年 5 月）

図 5　3 種類のベンチ（京王線明大前駅，2009 年 10 月）

それを発見したとき，ホームを見回すと，変な形のベンチが目に入った（図 5）。普通のベンチの両脇に，寄り掛かり型のもの（同図の左側），軽くお尻を乗せるような形のもの（同じく右側）の 2 種類が並んでいる。前者は，図 4 の雰囲気をそのままベンチにしたような感じが漂っている。

もしかしたら，寄り掛かられてできた痕跡に気づいた駅員が，ベンチとして製品化することを思いついたのかもしれない。そう思いたくなるほど，両者は似ている。

このベンチが気になった人はほかにもいて，こんな記事が書かれている（読売新聞写真部，2007）。

「京王線明大前駅のプラットホームに今春（2007 年，引用者注）から新型のベンチが設置されました。通常のベンチに加えて，お尻のあたりに腰掛ける板のある高座型，腰のあたりに板がある寄り掛かり型と高さが異なる 3 種類のベンチが並んでいます。『どっしりと座り込んでしまうと，年配の方々は立ち上がるのが大変では』という社員の声から，試作品を製作。社内の声を聞き，試験的に設置したそうです。導入後の利用者アンケート調査では，お年寄りだけでなく，妊婦さんや待ち時間が短い乗客からも好評だということです」。

この記事では，製作の経緯と出窓付近の痕跡との関係についてはふれられていない。

みんなの痕跡

筆者の出身地にある善光寺。本堂を入るとすぐ脇に，市民から親しまれているびんずるさんが鎮座している（図 6）。

「本堂正面から外陣に入りますと最初に目にとまる像が，びんずる（賓頭盧）尊者です。お釈迦様の弟子，十六羅漢の一人で，神通力（超能力に似た力）が大変強い方でした。俗に『撫仏』といわれ，病人が自らの患部と同じところを触れることでその神通力にあやかり治していただくという信仰があります」（善光寺，2009）。

びんずる尊者は江戸中期の 1713 年に作られ，それ以来，大勢の人に触られた結果，どこもかしこも摩耗し，黒光りしている。

「腹部やひざはつるつる，目や鼻，口は元の形が分からないほどすり減っている。肩にひび

図 6　善光寺のびんずる尊者（善光寺，2009）

が入ったり，右手の指が欠けたりと満身創痍だ。左手首はかつて外れたことがあったのか，パテで固定されている」（信濃毎日新聞，2009）。

2009年はじめ，この年の御開帳を控え，びんずる尊者像が初めて修繕に出された。

「傷みが目立つようになった左手首や背中などを直す。顔も目鼻立ちが分からないほどすり減っているが，善光寺事務局は『三百年慣れ親しんできたので，顔はそのままにしておく』としている」（東京新聞，2009）。

確かに，修繕後も，顔を含め，摩耗部分がそのまま残されている。

同じような信仰は日本中に無数にあるようだ。筆者が実際に観察しえた範囲でも数カ所に及ぶ。その1つ，牛嶋神社（東京都墨田区向島）の撫牛（図7）には，以下のような説明がなされている。

「撫牛は仏寺の御賓頭盧様（おびんずるさま）とおなじように，自分の体の悪い部分をなで，牛の同じところをなでると病気がなおるという信仰で，体だけではなく心もなおるという心身回癒の祈願物である」。

図7　撫牛に触れる友人（2008年12月，牛嶋神社境内）

図8　金箔の貼られた薬師如来（2009年10月，大圓寺）

ここの牛は心まで治してくれるらしい。

このほか，東京巣鴨のとげ抜き地蔵（高岩寺）境内には，具合の悪い部位を洗うことで，疾患が治るという「洗い観音」がある。

患部に相当する部位を撫でるという信仰と逆のタイプもある。JR目黒駅から雅叙園に向かう急坂（行人坂）の途中にある大圓寺の薬師如来がそれである。この像は本堂手前にあり，部分的に表面が金箔で覆われている（図8）。

「お祈りの跡だ。ぼくも三枚五百円の金箔を求め，それを仏像の肩とこめかみと腰に貼ってお祈りした。何とかしてください」（赤瀬川，2008）。

金箔を貼ったら，「おん。ころころ。せんだり。まとうぎそわか」と真言を唱えて祈願する。

金箔は，頭部，胸・腹部，背・腰部に集中して貼られている。

撫でるのではなく，なぜ貼るのか。清掃中のお坊さんにたずねると，「きれいでしょう。それに，びんずる尊者は木でできているから撫でても痛くないけど，ここの如来さんは石でできていますから。こういう習慣はタイによくあるそうです」と説明してくれた。このお寺には撫

図 9　石像寺の奉納絵馬（kazu, 2007）

仏もあり，以前は外に置かれていた。ただ傷みがひどくなったため，現在は本堂内に置かれている。

京都上京区にある石像寺（しゃくぞうじ）は別名，釘抜地蔵と呼ばれ，境内入口には，やっとこのような大きな釘抜きが置かれている。釘は苦のシンボルである。

2008 年暮れに訪問した際も，多くの参拝客を目にし，苦を抱える人の多さを実感した次第だ（境内には撫仏も置かれている）。

本堂の外壁には願いが成就した人たちによる奉納絵馬が隙間なく貼られている（図 9）。絵馬には，それぞれ八寸釘と小振りの釘抜きが付いていて妙なリアリティがあり，その迫力と数には誰しも圧倒される。

ここを訪れた河合（2008）は，千本ゑんま堂の水子地蔵，狸谷山不動院の狸の置物を含めながら，つぎのように解釈する。

「このように多くの成就した願が積み重なり，また水子の供養を願う地蔵が多く並んでいることは，全体としての強烈なパワーと守りを感じさせる。狸谷山の狸の置物と同じように，多くのものが並んでいることは，自分ひとりだけではないのだという心の支えと，実績を感じさせる。つまり，無数の絵馬や地蔵は，その計り知れない癒しに向かうパワーを示しているように感じられ，そこを訪れた人をきっと励ましてくれるに違いない」（傍点，引用者）。

磨り減った撫仏（もちろん，撫牛も金箔仏も絵馬も）は，いわば目に見えないコミュニティの体現でもある。つまり，自分と同じ悩みを抱える人がこんなにもいる，今，目の前で撫でている人も自分と同じ気持ちでいるに違いない，そして私は一人ぼっちではない，という実感をもたらしてくれるからである。磨り減っていればいるほど，絵馬が多ければ多いほど，その実感は強化されるに違いない。

仕事と痕跡

2006 年，江戸東京博物館で，森永ミルクキャラメルの紙箱展示が企画された。そこを取材に訪れた記者は「展示ケースの前では親子や孫がのぞき込んで『森永は高級品だから遠足のときしか買ってもらえなかったの』といった話し声」を耳にする（南条，2006）。その話を受けて，学芸員の橋本さんはこう語る。

「“会話を引き出せる仕事”にあこがれて学芸員になりました。展示ケースの前で話が弾み，身を乗り出す人も少なくありません。…閉館時に見回って，ガラスに指紋が付いているとうれしいです」（傍点，引用者）。

ベタベタと付いた指紋は橋本さんにとって，忌避すべき汚れではなく，見学者の関心の証となっている。

秋葉原のヨドバシカメラで歯科医院を開業している野嶋さんは，この 20 年間の変化（たとえば，患者から患者さんへ，そして患者さまと

いう呼び方の変化）にふれる中で，「日々食べ物を摂取するとき使う“口”のトラブルは生きてきた歴史の痕跡だ」と語る（佐々野，2006）。

「口からは人生が見えます。人生を変えることは難しいけど，治療によってより良い人生を取り戻すお手伝いをすることはできます」。

歯科医が患者の口内をこのように見ているとは思いもしなかった。筆者の口から，医師はどのような人生を見ているのか，気になったのは言うまでもない。

学芸員にとっても，歯科医にとっても，痕跡は仕事の動機付けになっている。

高齢者の痕跡

加齢とともに記憶力も低下する。ついさきほどのできごとにもかかわらず忘れてしまったり，洗顔や歯磨きのようなルーティンワークは，それを遂行したか否か思い出せなかったり，といった具合だ。

母親の介護日誌を連載していた落合（2008）が，ある回で，マルコム・カウリーの著作（Cowley, 1988）を紹介しつつ，彼と同じ80代の友人から届いたクリスマスカードの内容を引用していた。

「ぼくらの生活に欠くべからざる老年の智恵」として，「歯ブラシが濡れていたら歯を磨いた証拠。朝，ベッド脇のラジオが温かかったら一晩中つけっ放しにした証拠です。右足に茶，左足に黒の靴を履いていたら，靴箱に茶と黒のもう一足があることは充分に考えられます」。

そう気づく前に他人によって身辺をきれいにされてしまうと，自分の行動を確認する術を失う結果となる。

痕跡過剰なデジタル社会

かつて，うわさの寿命は75日だった。その日数がインターネットの台頭で飛躍的に伸びつつある。

たとえば，倉田（2008）は学校裏サイトに関するエッセイの中で，このような状況を危惧している。

「転校しても，前の学校の裏サイトから情報まで一緒についてきてしまうことだってある。本来，人間は忘れっぽい動物だ。どんな事件があっても時間が経てば衝撃は薄れ，記憶も曖昧になっていく。必要な情報に関しては忘れるのを防ぐため，特別に『記録』『保存』してきた。しかし現在，不必要な情報まで簡単に『記録』され『保存』され，さらには『伝播』までされてしまう。人間の『忘れる』という大いなる美点が無力化しているのだ」。

サーチエンジンはネット上の情報をくまなく検索する。全情報が検索対象となるわけではないが，それでも，いったん消去したはずの情報が「キャッシュ」で表示され，またInternet ArchiveのWayback Machineを使えば，過去の画面にも辿り着くことができる。オリジナルは削除し得ても，いったん転送された情報にその効果は及ばない。

ネットショッピングを利用すると，その購入履歴がサーバーに残る。それがデータベース化され，次回の買い物時にお薦め商品が表示され，あるいは関連商品が表示される。アマゾンの画面で，以前こんな「不思議な現象」が起きた（小堀，2008）。

「ある洗剤の商品名を検索すると，何の関係

も無さそうな『おすすめ』商品が次々に現れる。薬品，家電製品用のタイマー付きコンセント，ポリ袋，そして『自殺』に関連する書籍。このところ，浴室などで硫化水素ガスを発生させる自殺が，各地で相次いでいた。ある洗剤と薬品を混ぜると，ガスが発生する。そんな情報がネットで流布していた。特定の洗剤を買った人が，混ぜるとガスを発生させるという薬品を買い，『自殺』関連書籍を買っていた――。『おすすめ』が示していたのは，そういうことだった。アマゾンジャパンは対策をとり，現在（2008年11月，引用者注）この表示は出てこない」。

何が買われようと，単なる買い物として処理され，そこから抽出された購入パターンが，顧客にフィードバックされる。それがいい方向に作用する場合もあれば（結果としての「集合知」），望ましくない方向に作用する場合もある。

ネット上の行動はデジタル化されているため，すべて記録として残り，それらはパソコン側に，たとえば閲覧履歴として蓄積され，サーバー側にも蓄積される。

ネット上の情報，行動履歴は記録として残り，つまり痕跡として蓄積されていく。

痕跡としての貼り紙

痕跡とは，冒頭でも述べたように，アプローチでもある。ゴミを捨てる人がいるから，そこに「ゴミを捨てるな」とかかげ，立小便をする人が絶えないから鳥居の絵を書くのである。注意書きは，それ自体，痕跡ではないものの，注意の対象となるようなことがそこで行なわれていることを示してもいる。図10の貼り紙もそうした一例である。

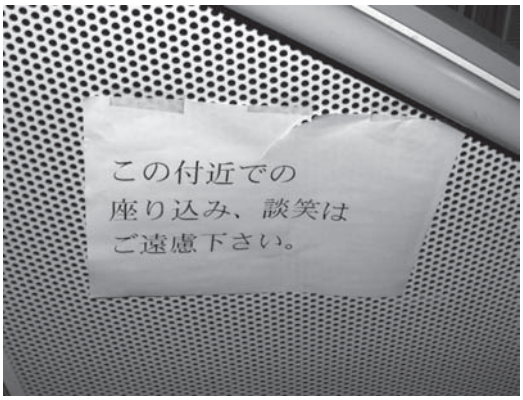

図10　5階と6階の間の階段に貼られている注意書き（2008年3月，東京経済大学6号館）

この階段のある建物は5階までが教室で，6階以上はふだん学生は利用しない。したがって，5階と6階の間の階段を通る人は少なく，学生たちにとって，静かで居心地のいい場所となっている。6階には教員研究室があることから，教員がときどき，この階段を利用する程度だ。だが，その際，階段にいる学生たちが通行の邪魔になるのだろう。

この貼り紙は，注意書きではあるが，皮肉なことに，注意の対象となっている当の行為，すなわち「座り込み」と「談笑」を喚起する働きもしている。つまり，注意書きは，ここで，そうした行為をする人が多いことの痕跡，言い換えれば「ネガティブな社会的証明」（Goldstein, et. al., 2007）でもあるからだ。そのように考えると，この注意書きがねらいどおりの効果を発揮しているかどうかは疑わしい。

社会心理学研究における痕跡

痕跡の研究は手法としては観察法に頼ることとなる。Zechmeister et al.（2001）は，観察法を「直接観察」と「間接観察」とに分け，さら

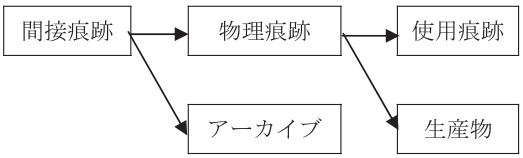

図 11　間接痕跡の観察対象（釘原（2009）の一部）

に後者を「物理痕跡」と「アーカイブ」とに区別している（図 11，痕跡が観察法で取り上げられること自体，珍しい）。物理痕跡は，さらに「使用痕跡」と「生産物」の 2 種類に分けられる（Zechmeister et al., 2001）。

「使用痕跡」の例としては（釘原，2009），灰皿の吸い殻の数，自動販売機周辺のゴミの量，本に付いた手垢があり，それぞれ，イライラの程度や待ち時間の長さ，モラルの程度，興味内容の指標となりうる。このような研究の例として，橋本（1993）の高速道路サービス・エリアのゴミ捨て行動を扱ったアクションリサーチがある。彼はゴミ箱の中身を分析し，人は数十 cm というわずかな距離でも，労力を惜しむ傾向のあることを明らかにした。

「生産物」の例としては，個人レベルでは落書（き）やインテリア，筆跡（根本，2007），文化・社会レベルでは服装や商品など，その時代や社会固有の生産物が含まれ，枚挙に暇がない。落書きといえば，2008 年，話題になったローマでの落書き（消し）騒動は記憶に新しい。つぎのような傷も生産物に含まれよう。

大分県中津市の料亭「筑紫亭」に，「出撃前夜の特攻隊員が最後の一杯を飲んだ部屋が残っています。柱やかもいが刀傷だらけ。明日出撃するという悲しみとうっぷんを晴らそうと，狂ったように刀を振り回したんでしょうね」（城山，2006）。

落書きについては，以下のような研究がある。Green（2003）は，トイレの落書きを採集し，そこから，トイレのような匿名空間では社会的に容認されない態度や感情が多く表現されていることを明らかにしている。より最近では，カトリン・フィッシャーが女子トイレの落書きを分析している。新聞報道によれば（篠田，2009），ドイツ・ボン大学の彼女は，キャンパス内の女子トイレ 40 箇所で落書きを収集（撮影），その 700 件の落書きを分類した。その結果，落書きは「自分の思いをひたすら主張する」ものと「自分のことは棚に上げて他人を攻撃する」ものとに大別された。前者の例としては，哲学的な話題など思い込みの強い内容，後者の例としては他人の落書きの文法のミスを指摘する内容があるという（落書きは刑法の器物損壊罪に該当するため，定期的に消されているという）。視点が異なれば，同じ対象でも見え方が異なる。

以上の議論を整理すると，痕跡研究の対象は表 1 のようになろう。

表 1　痕跡研究の対象

痕跡の種類		例
物理痕跡	使用痕	行動の残滓（手垢、ゴミ，吸殻，欠け，携帯履歴など），身体の傷
	生産物	落書き，撫仏，絵馬，インテリア，メールアドレス
	所有物	携行品，衣服，購入物
経験痕跡		思い出，記憶，PTSD
行動・事象痕跡		注意書き，貼り紙
記録物		書簡，日記，ブログ

痕跡は，まず，物理痕跡（目に見える痕跡），心理痕跡（目に見えない痕跡），記録物の３つに分かれ，物理痕跡は，さらに，使用痕（行動の非意図的痕跡，行動の副産物），生産物（痕跡を残すことを意図した行動，所有物（その人が利用，使用した物）に分かれる。

おわりに

わたしたちは，自分の痕跡，家族の痕跡，他人の痕跡，そして社会や時代の痕跡に囲まれながら生活している。浸透する一方のデジタル技術は保存が初期値となっていて，何もしなければ，行動の痕跡は自動的に残ったままである。現金での買い物は誰がいつどこで買ったか，本人しかわからない。しかしクレジットカードで買った途端，これらはすべて記録として蓄積され，同一人物の買い物行動，同一商品の購買層といった分析を可能にする。

こうして増える一方の痕跡をつうじて，わたしたちは，たとえば携帯電話の履歴から「自己観察」（Rodriguez, & Ryave, 2001）の機会を得，家の中にあるものを手がかりに家族の意味を確認する（Csikszentmihalyi, & Halton, 1981）。

今回取り上げた物以外にも，痕跡として注目すべき研究対象として，形見（池内，2006），自傷行為による傷，さらには心的外傷後ストレス障害（PTSD）のように直接見ることのできない痕跡があげられる。

「平成の大合併」で，古い地名が一気に消えた。1999 年時点で 3,232 あった市町村が 2010 年 3 月には 1,751 になるという。消え行く古い地名の影響も集合レベル（社会的アイデンティティ）で重要な研究対象となりえよう。

古くからある地名は，もとの地形や用途，歴史の痕跡であり，過去と現在をとり結ぶ重要な手がかりである。それにもかかわらず，効率優先の掛け声のもと，古来の地名は絶滅の危機に瀕している（かな表記も同様のはたらきをしている）。「奥州市」「雲南市」「南アルプス市」「四国中央市」「つくばみらい市」「さいたま市」。あげればきりがない。これらの地名は，かつて大合併があったことの痕跡，歴史に無頓着な私たちという痕跡でしかない。

痕跡の重要性は古い建物にもあてはまる。建築家の藤森（2009）は，「建築や都市は記憶の器」で，それらを壊すことは「人々の記憶を喪失させること」と同義であり，「過去との連続性を感じられること」を強調する。最近の廃墟ブームも，こうした心情のあらわれかもしれない。

ここまで痕跡概念を拡張してしまうと，汎痕跡論者のそしりを免れないかもしれない。しかし，痕跡そのものから，そして痕跡という見方からわたしたちが知りうることは数多く，これらを手がかりに人びとの気持ちや行動，時代や社会を探る楽しみもある。

今年度のゼミ合宿では，痕跡を求めて，暑い広島を訪れた。学生たちの希望場所は当初，多岐にわたり（そもそも痕跡物件はどこでも入手できる），最終的に京都と広島に絞られた。広島は，その決選投票で決まった場所である。

広島に着いて最初に行った場所が広島平和記念公園の原爆ドームだった。原爆ドームの保存をめぐっては，これまでにも覆いや移設で保護するか，あるいは原状のまま維持するか，検討が重ねられてきた。その結果，原状維持で行くことになったようだ。

学生たちの目に，原爆ドームはどのような痕跡と映ったのだろうか。

引用文献

赤瀬川原平（2008）．目黒（歩きたい No. 121）毎日新聞，2008 年 10 月 22 日夕刊

Cowley, M.（1980）．*The view from 80*. Viking Press.
（小笠原豊樹（訳）（1999）．八十路から眺めれば　草思社）

Csikszentmihalyi, M., & Halton, E.（1981）．*The meaning of things: Domestic symbols and the self*. Cambridge University Press.
（市川孝一・川浦康至（訳）（2009）．モノの意味：大切なものの心理学　誠信書房）

藤森照信（2009）．建築は人々の「記憶の器」 日経アーキテクチュア（編）有名建築その後　日経 BP 社．pp. 5–12.

藤島喜嗣（2009）．携行品における痕跡に基づくパーソナリティ判断　日本心理学会第 73 回大会発表論文集，p. 215.

Goldstein, N. J., Martin, S. J., & Cialdini, R. B.（2007）. *Yes !: 50 scientifically proven ways to be persuasive*. Profile Business.
（安藤清志・高橋紹子（訳）（2009）．影響力の武器・実践編　誠信書房）

Gosling, S.（2008）. *Snoop: What your stuff says about you*. Basic Books.
（篠森ゆりこ（訳）（2008）．スヌープ！：あの人の心ののぞき方　講談社）

Green, J. A.（2003）. The writing on the stall. *Journal of Language and Social Psychology*, **22**, 282–296.

橋本俊哉（1993）．高速道路サービス・エリアにおける「ゴミ捨て行動」の分析　社会心理学研究，**8**, 116–125.

池内裕美（2006）．喪失対象との継続的関係：形見の心的機能の検討を通して　関西大学社会学部紀要，**37**（**2**），53–68.

石神裕之（2006）．近世考古学からみた江戸山の手のごみ処理　関東都市学会年報，**8**, 61–71.

河合俊雄（2008）．町中に突然開ける別世界　河合俊雄・鎌田東二（著）京都「癒しの道」案内　朝日新聞社．pp. 53–73.

kazu（2007）．釘抜（くぎぬき）地蔵 〈http://ameblo.jp/kazue-fujiwara/entry-10034961504.html〉（2009 年 10 月 29 日確認）

小堀龍之（2008）．洗剤を買った人（ネットはいま）　朝日新聞，2008 年 11 月 5 日夕刊

釘原直樹（2009）．観察法　安藤清志ほか（編）新版 社会心理学研究入門　東京大学出版会．pp. 163–187.

倉田真由美（2008）．学校裏サイト（本音のコラム）　東京新聞，2008 年 4 月 24 日朝刊

楠原佑介（2008）．海外では古い地名に正統性　東京新聞，2008 年 12 月 14 日朝刊

南条広介（2006）．“黄色い箱”の思い出探して（東京解剖図鑑）東京新聞，2006 年 8 月 6 日朝刊

根本 寛（2007）．筆跡事件ファイル　廣済堂出版

落合恵子（2008）．老いを笑える 80 歳（母に歌う子守歌）　東京新聞，2008 年 10 月 19 日朝刊

Rodriguez, N., & Ryave, A. L.（2001）．*Systematic self-observation: A method for researching the hidden and elusive features of everyday social life*. Sage.
（川浦康至・田中 敦（訳）（2006）．自己観察の技法　誠信書房）

桜井準也（2004）．モノが語る日本の近現代生活　慶應義塾大学教養研究センター

桜井準也（2006）．近代考古学の話 3　朝日新聞，2006 年 9 月 20 日夕刊

佐々野慎一郎（2006）．口に透ける人生の痕跡（情熱解剖図鑑）　東京新聞，2006 年 10 月 4 日朝刊

信濃毎日新聞（2009）．「びんずる尊者」満身創痍　信濃毎日新聞，2009 年 1 月 1 日朝刊

篠田航一（2009）．トイレの落書き　毎日新聞，2009 年 8 月 15 日夕刊

城山三郎（2006）．国民ひきずる楽観論（「靖国」を語る・下）　東京新聞，2006 年 8 月 11 日朝

刊
たきうどぅん（2007）．ほうきの目を入れる習慣〈http://blog.takidhun.org/?eid=684014〉（2009年10月29日確認）
谷川健一（2008）．地名を残すことがなぜ大切なのか　みやびブックレット，**24**，14–23.
谷畑美帆（2006）．江戸八百八町に骨が舞う　吉川弘文館
東京新聞（2009）．熱気球　東京新聞，2009年1月24日朝刊
読売新聞写真部（2007）．優しい「段差」〈http://blogs.yomiuri.co.jp/shashun/2007/07/post_a01b.html〉（2009年10月29日確認）
Zechmeister, J. S., Zechmeister, E. B., & Shaughnessy, J. J.（2001）．*Essentials of research methods in psychology*. McGraw- Hill.
善光寺（2009）．びんずる尊者　〈http://www.zenkoji.jp/hondou/kaisetsu/02.html〉（2009年10月29日確認）